「エディプス・コンプレックス考」

池　侑秀（家政保健学科・教授）

今から約1世紀前、すなわち19世紀末から20世紀初頭にかけて、オーストリア出身の精神科医フロイドの提唱した精神分析学は、精神医学にとどまらず、哲学、文学、社会学をはじめさまざまな分野に大きな影響を及ぼしました。

フロイドはギリシャ神話（ソフォクレスの悲劇「オイディプス王」）にインスピレーションを受けて、彼の研究の核となる理論を完成させたと言われています。

フロイドによれば、男の子は、児童期（男根期―思春期前）には母親に思慕を抱くため父親を憎み敵対視すると考えました。彼はこうした心理傾向を「エジプス（エディプス）・コンプレックス」と名づけ、コンプレックスの根底にはすべて、このエディプス・コンプレックスがあると提唱しました。（これに対して、女の子が父親に対して深い愛情を抱き、母親に反感を抱く傾向を、同じくギリシャ神話の物語から、エレクトラ・コンプレックスと名づけたのは、フロイドの弟子のユングでした。）

小児の精神の発達段階（性格と本能行動）

精神性的発達(Psychosexual development)　(S. Freud 1856-1936)

A. 口唇期(Oral stage)　0ヶ月～1歳半(18ヶ月)

　ナルチスムス(←ナルチシス)　あまえ　なめる　のむ(飲み込む)　噛む

B. 肛門期(Anal stage)　8ヶ月～4歳

　アンビバレンス(両価性)　頑固　ケチ(しまりや)　しまりがない(だらしがない)　すまない

C. 男根期(Phallic stage)　3～4歳―6～7歳

　<u>エジプス複合(Oedipus complex←ギリシャ神話)</u>　去勢不安　男根羨望　同一化　超自我の形成

※潜伏期(Latency period)

D. 性器期(Genital stage)　12歳～

　自我の同一化

土居健郎『精神分析と精神病理』（第二版）より要約

エディプス・コンプレックスは英語読みですが、これを「エジプス・コンプレックス」(日本風仮名遣い)で検索しても、医学辞典や国語辞典には該当する欄がありません。ここは正確に「エディプス・・」で検索する必要があります。

エディプス・コンプレックス：

[心]男の子どもが無意識のうちに母に愛着をもち、自分の同性である父に敵意を抱く傾向。父としらずに父を殺害し、生母と結婚したギリシャ神話のオイディプスにちなんでフロイドが提唱した用語。

⇔エレクトラ・コンプレックス

〖広辞苑〗

POD（Pocket Oxford Dictionary）で“Oedipus complex”を引くと次のような解説がありました。それに続いて、Oedipus王のギリシャ語名（ギリシャ文字ではなくローマ字つづり）も見られましたので一緒に示します。

Oedipus complex:

child's, esp. a boy's, subconscious sexual desire for the parent of the opposite sex.

Oedipal:

adj. [Greek　Oidipous who unknowingly married his mother.]

〖POD〗

Oidipous = oidi + pous：oidi（←oiden）は‘腫れる’（ oedemaと言う医学用語もあります)、pousは‘足’（英語の octopus ; 8 個の足を持った生き物＝蛸）でOidipous 王は「足を腫らした王」または「足のむくんだ王」の意味となります。（その理由については後ほど・・・）

さて、長いこと小児科はやっておりますが、実は私は心理学の専門家ではありませんので、本日はエディプス・コンプレックスの精神医学的あるいは心理学的な内容についてお話をするつもりはありません。フロイドがインスピレーションを受けて精神分析を始めるきっかけとなったエディプス（オイディプス）王のギリシャ神話（ギリシャ悲劇）についてお話をしたいと思います。

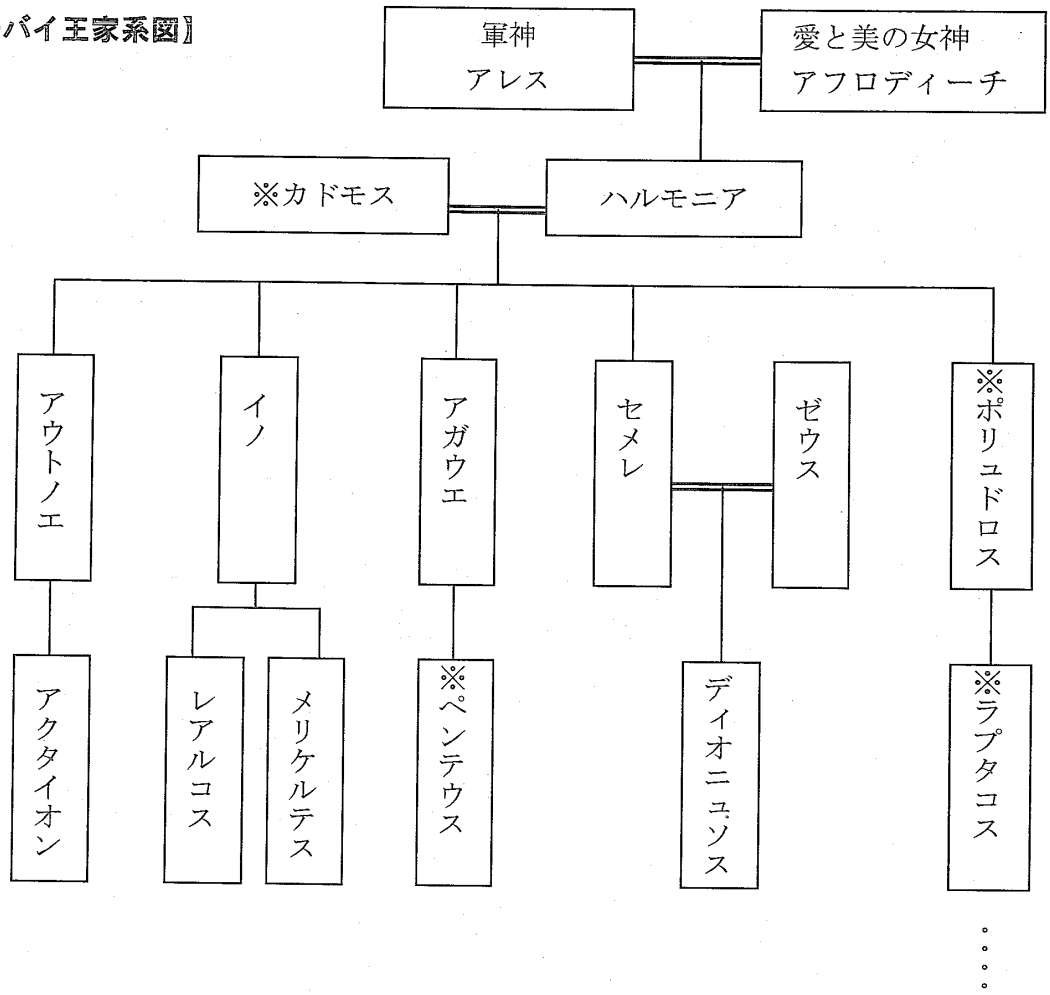
神話のことですので年代ははっきりしませんが、場所はエーゲ海に面した古代ギリシヤのテーバイ国です。

テーバイ王国はフェニキュアからギリシャに移住してきたカドモスによって建国されました。彼は、（軍神）アレスと（愛と美の女神）アプロディーチ（ヴィーナス）の間に生まれた娘ハルモニアを妻に迎え子孫を残しました。この一族の中にはかの有名な酒神ディオニュソス（バッカス）もいます。

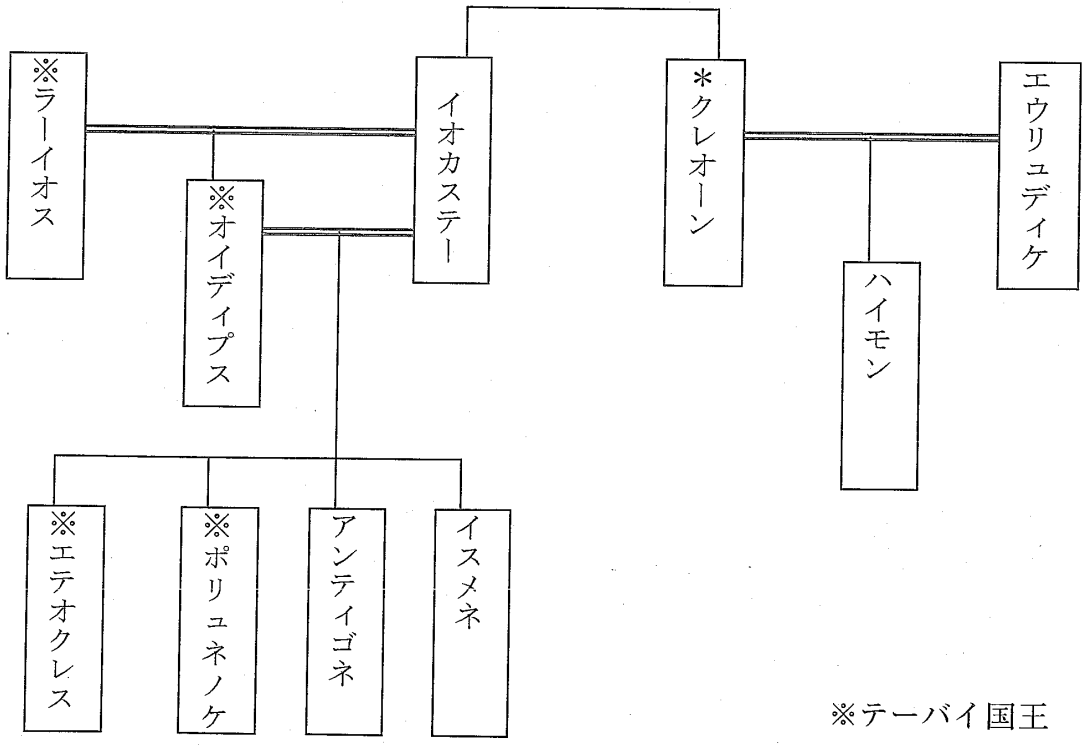
—以下　岩波文庫：アポロドーロス「ギリシャ神話」（高津春繁訳）などを引用しつつ話を進めます。

この王家の数代後にラーイオス（エディプス王の父）が王になり、遠縁のイオカステー（またはエピカステー　エディプス王の母、後に彼の王妃）を娶りました。二人の間には長い間跡継に恵まれなかったので、デルポイに神託を請うたところ、神は‘男子をもうけるべからず—と言うのは生まれてくる男子は父殺しになるであろうから’と言う託宣を下しました。しかし彼（ラーイオス）は酒に酔ってこの禁を破り妻と交わり男子をもうけました。

【テーバイ王家系図】



【オイディプス王の家系図】



※テーバイ国王

そしてその踵をブローチで貫いて牧人（羊飼い）に棄てるようにと手渡し、この男は赤子をキタイロン（山）に棄てたが、コリントス王ポリュポスの牛飼いが赤ん坊を見つけて、王の妻ペリボイアのところに連れて行った。彼女は子供を養子とし、自分たちの子としてその踵を治した後、オイディプースと呼んだ。この名は彼の両足が腫れていたところから付けたものであります。

子供は成人し、膂力は同輩の者にすぐれていたので、彼等は彼（オイディプース）を妬んで、（コリントス王の）偽りの子であると罵った。彼は（王妃）ペリボイアに尋ねたが何事も知ることができませんでした。そこでデルポイへとやって来て、自分の本当の両親について尋ねました。神は彼に‘自分の故郷に赴くなかれ、父を殺し母と交わるであろうから’と言いました。これを聞き、自分がコリントス王夫妻より生まれたものと信じていたので、コリントスを捨て、戦車に乗ってポーキスを急ぎ進みつつある時に、とある狭い道で戦車に乗っているラーイオスに出遇いました。そしてポリュポンテース（ラーイオスの伝令使）が道をあけよと命じ、かつ彼（オイディプース）がそれに従わず、ぐずぐずしたために、彼の（戦車の）馬のなかの１頭を殺してしまいました。そこでオイディプースは、怒ってポリュポンテースとラーイオスの両人ともに殺害し、テーバイに着きました。

ラーイオスはプラタイアイの王ダマシストスが葬り、王国はメノイケウスの子クレオーン（イオカステーの兄）が継ぎましだが、彼の治世中に小さからぬ災害がテーバイを襲いました。というのは、ヘーラーがエキトナを母としデューポーンを父とするスピンクスを送ったからであります。これは女面にして胸と胴と足は獅子（ライオン）、鳥の羽（翼）をもっていました。（エジプトのスフィンクスは人面を持った雄ライオンですが、翼はありません。）

ムーサより謎を教わって、スピンクスはピーキオン山に座し、テーバイに謎をかけました。その謎は「一つの声を有しながら、四足、二足、三足になるものは何か」というものでした（別伝では「二人の姉妹で、一方は他方を産み、また逆に、他方がいまひとつの方を産むのは何か」というもの）。

テーバイの人々は、この謎が解かれたときにはスピンクスより逃れ得るであろうという神託をうけていたので、しばしば会合して謎の意味を研究しました。謎を解けないものは食べられて、多くの命が失われ、ついにクレオーンの子ハイモーンが犠牲となった時、クレオーンはこの謎を解いたものに王国を譲り、ラーイオスの妻を王妃として与えると布告しました。オイディプースはこれを聞き、スピンクスの謎の答えは「人間」である。すなわち赤子のときは四肢で歩くから四足、成人して二足、老人になると杖を第三の足として加えるから三足であると言って、謎を解きました（別伝の謎の答えは「昼と夜」）。そこでスピンクスは城山より身を投げて死に、オイディプースは王国を継ぎ、自分の母と知らずに王妃（イオカステー）を娶り、４人の子を生ませました。

後に秘密が明らかになった時、イオカステーは縄を結んで縊れ、オイディプースはわれとわが目をピンで突き刺し盲目となりました。テーバイより追い出された後、アッチカのコローノスに来たり、テーセウスに受け入れられた後、間もなく死にました。

以上が、ギリシャ神話の中のオイディプス王の（悲劇の）物語であります。フロイドのようなインスピレーションをうむ事は無理にしても、何か少しでも心に残るものがあればこれに過ぎたことはありません。

参考文献：

日医ニュース　日本医師会
アポロドーロス：ギリシャ神話（高津春繁訳）　岩波文庫
楠見千鶴子：ビシュアル版　ギリシャ神話物語　講談社
豊田和二監修：図解雑学　ギリシャ神話　ナツメ社
土居健郎：精神分析と精神病理（第２版）　医学書院
土居健郎：精神分析　創元医学新書
新村出編　広辞苑　岩波書店
ＰＯＤ（Pocket Oxford Dictionary）